第８９０号
令和５年１月６日

佐渡市立金井小学校
佐渡ことば・こころの教室

教室だより

〒952－1209
佐渡市千種丙178番地1
TEL:0259(63)4156(直)
4115(代)
FAX:0259(63)4117
E-mail:skotoba@sado.ed.jp
HP:http://kanai-es.sado.ed.jp
（教室だよりのバックナンバーも掲載中）

協調的幸福

佐渡市教育委員会
教育長 新発田 靖

次期教育振興基本計画(2023～27 年度)の策定作業が中教審部会で進められています。大きな柱の１つとなる「日本型ウェルビーイング」についての素案が提示されました。自尊感情や自己効力感の高さなど欧米型の「獲得的幸福」だけでなく，日本では人とのつながりや思いやりなど「協調的幸福」が重要な意味をもつと位置づけられ，両者のバランスを重視したいということです。

「協調的幸福」についてもう少し述べると，利他性や社会貢献意識なども含まれ，国とか親とかが言ったことに従っていればいいというわけではなく，自分で判断しながら社会でのつながりを作り，一緒に生きていく社会を作っていくということだそうです。

「佐渡ことば・こころの教室」は，一人一人の子どもに，「獲得的幸福」だけでなく「協調的幸福」も大事にした教育を実践されています。

これからも子どもたちの幸福を柱にした取組をますます発展されることをお祈りいたします。

耳は掃除しなくていい

佐渡総合病院 耳鼻咽喉科
医長 池田 良

「耳掃除はどうやればいいのか，どれくらい小まめにすればいいのか」という質問を受けることがあります。

人の耳には，耳あかを自然に耳の穴の外へ送り出す働きがあります。多少の耳あかであれば家庭で無理に取る必要はまったくありません。綿棒や耳かきで習慣的に耳掃除をしている人も少なくありませんが，入浴後にぬれた耳を軽くぬぐう程度が無難です。耳掃除は医学的には不必要かつ危険な行為であることをご理解ください。

家庭で綿棒や耳かきを使って耳掃除することは，常に危険を伴います。奥までいじりすぎると，逆に耳あかを押し込んで「耳垢栓塞」となります。強く拭ったりすると耳を傷つけて「外耳炎」を起こすことがあります。また，耳掃除をしている時に他人と接触したり，自分の肘が周りの壁などに当たると鼓膜を破ってしまうこともあります。特に子どもは想定外の動きをするためにトラブルが起こりやすく，注意が必要です。

どうしても耳あかが気になるときは耳鼻咽喉科を受診することをお勧めします。

器用さを育てる

「器用さは，なぜ必要なのですか？」と，ある先生から聞かれ，とっさに「事故防止の点から」と答えました。例えば，靴紐がよく結べないとどこかに引っかかって転んだり，将来の職場内で服の裾や袖のボタンが留まっていないと機械に巻き込まれたりする可能性があります。

その他にも器用であると助かる場面は衣食住の中にたくさんあります。かわいくリボンを結んだり，食材をおいしく見せる切り方をしたり，おもてなしや居心地の良い空間づくりの一品を準備したり。

手と頭脳は密接につながっていることを学校では多く感じます。計算の最初は，ブロックやおはじきを操作し，見える化して教えます。高校数学でも，どう考えたらよいか難しい問題は「まず手を動かして考えよ」と指示されることがあります。

ことば・こころの教室では，カードやビーズなどを使って手作業を含んだ時間をもつようにしています。手を動かしながら作戦を練ったり，要領のよいやり方を考えたりすることができます。

ここでいう器用さは生活経験の積み重ねが大切です。トランプ配りや料理の盛り付けなど，普段何とも思っていない遊びや生活の中の手を動かす作業をぜひ子どもたちに見せ，させてみてください。やって見せ，真似する過程が子どもたちにとって刺激になるはずです。　　　　（本間　雅美）

第２回親の会学習会（11 月 12 日）報告
講師：相談支援事業センターそらうみ　本間　奈美　様
演題：いきいきと暮らすためのスパイス
　　　～障害者福祉アートの取り組みから～

～感想の一部を紹介します～

本間さんが佐渡の障害者の自立や生きがいについて，新しい道を作ってくださり，感動しました。

実際に作品を目にして，作家さんの感性のすばらしさに感動しました。

こういった活動を通して，さらに温かい共生社会へとつながっていくと思いました。

様々な活動の機会や可能性が広がる取組だと思い，お話を伺って感動しました。今回はオンライン参加でしたので，ぜひ，間近で作品を見てみたいと思いました。

実際の絵を見ると，その鮮やかさや繊細さなど光る個性に感服いたしました。

親の会コーナー

保護者の声　　小学生保護者

小２の次男が吃音症でことばの指導をしていただいています。現在高校生の長女も同症状で通級していました。さらに，夫も学童期に通級していた我が家です。

この３人が口を揃えて言うのは，「教室は楽しい！」ということ。担当の先生と一緒に勉強したり，ゲームをしたりするのが毎回楽しみだそうです。

長女は，コロナ禍以前に開催されていたお楽しみ会のイベントで，ボランティアのお兄さんやお姉さんに優しくしてもらったことから，現在は子どもや親子向けイベントのボランティアスタッフをしています。そして将来の夢は保育士に加え，手話や要約筆記を習得し，困っている人のサポートがしたいと考えています。

夫は子どもの児童館を通じ，当時担当だった先生と再会することができました。長い年月を経て，また交流ができるのも当時の信頼関係があったからだと思います。

これまでも，これからも子どもたち一人一人の心に寄り添った指導をしていただけることに深く感謝しています。教室の子どもたちが自分らしく大きくのびのびと成長してくれることを願っています。